

*人と湖のかかわりの再生

25



「近い水」の暮らし(高度経済成長期以前)

湖はよごれなかった?
→湖岸の生活と生態システムの循環



隣近所での共有さんばし
•よごさない不文律
•オムツ洗いは禁止
•利用の約束事

昭和30年代の琵琶湖岸

写真: 前野隆資、提供: 琵琶湖博物館

26

「近い水」と「水の使い回しの文化」

～高島市針江地区～



高島生水の郷針江・カバタ

「カバタ」 高島市針江区

27

壺池：飲料水や野菜
等を冷やす
端池：残飯のついた
鍋などをつけて
おく
汚れものは流さない

彦根市、本庄地区の昭和30年代の 水利用 —琵琶湖博物館展示—



芭御守物館



28



Mother
Lake

「近い水」のある暮らし、水の使い回し、し尿の徹底肥料化 結果として、水域衛生の確保

●1950年頃の水とし尿の使い回し方



「遠い水」システムの導入 (水とし尿の使い捨てシステムの拡大)

現在の水の使い方



滋賀県基本構想での目指す方向性 「住み心地日本一の滋賀」

8つの重点テーマ(未来戦略プロジェクト)

3つの力(「人の力」「自然の力」「地と知の力」)を活かして
部局横断的・戦略的に取り組む8つの重点



6 重点テーマ8 みんなで命と暮らしを守る安全・安心 水害から命を守る

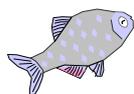
滋賀県の流域治水政策 研究者としての嘉田のこだわり からの政策提案 川の中の対策に加えて、川の外 (人が暮らす場)の対策も！



嘉田の地域調査でわかったこと

～地域生活現場を徹底して歩き、耳を傾けることで～

- (1) 琵琶湖周辺の人びとの暮らしと水とのかかわりを湖辺の各地を歩きながら、昭和30-40年代のちょっと昔の話を徹底して嘉田は聞き書き。
- (2) 当事者としての意識、人びとがこだわりをもっていて、今からでも復活したいと思っているのは水質そのもの以上に水とのかかわりだった。
- (3) つまり問題そのものが属地的、属人的に多様だった。
- (4) そして人びとの願望はハード面の整備にプラスして川との関わりの豊かさを求めている。



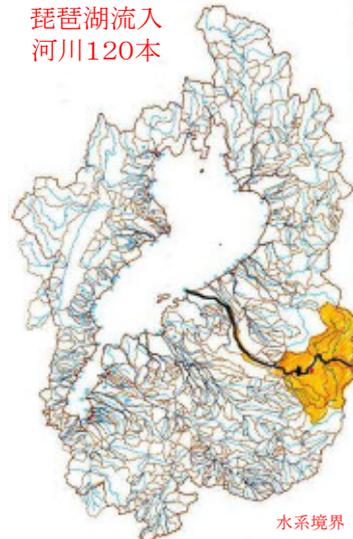
水は社会 ~水の境界と社会的境界はつながっている~

地域自治会
3000地区



地域境界

琵琶湖流入
河川120本



水系境界



水と人の3種の距離概念

1. **物理的距離**
普遍的尺度で計測可能な距離(*キロ、*メートル)、計測する自然科学的知が前提。
2. **社会的距離**
社会関係にひそむ親近性の程度
制度としての社会組織、この距離を縮小することが、社会参画・自治論とつながる、社会関係性の知が前提。
3. **心理的距離**
人が主観的に感じる近さの程度
情報の授受、行動への動機づけ、満足、幸せ感と深くつながる共感的知が前提。



“近い水”から“遠い水”へ

- **第1期:「近い水」共存期:**江戸時代から明治時代中期まで、藩政村の自治機能、多機能型水組織(治水・利水・環境組織の未分化、自己管理時代)、「あふれることを前提とした治水=流域受け止め型治水」
- **第2期:「遠い水」の出現:**明治22年町村合併、明治29年河川法制定、「河道閉じこめ型治水政策」の拡大、官僚的制御論の登場(水量計測)、地主制度の拡大、機能別水管理組織の拡大(発電、都市用水需要)



“近い水”から“遠い水”へ、そして今

- **第3期:「遠い水」の浸透・完成期:**昭和20-30年代、昭和20年代の洪水多発、「国土総合開発法」「水資源政策」「多目的ダム法」、高度経済成長、新河川法(昭和39年)、確率洪水・基本高水論の登場、「中央管理的制御論の完成」、「治水公費主義」「水利権許認可主義」
- **第4期:行き過ぎた「遠い水」への反省と「近い水」の再生・創生:**平成9年河川法改正、「環境」概念の導入、「住民意見の反映」、河川整備計画、低成長時代、「超過洪水」の認識、「水需要抑制」、新しい「流域型治水」の必要性



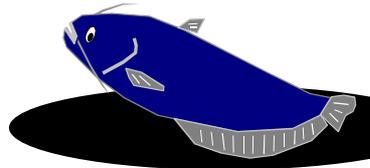
“近い水”が生きていた ～人びとが好んで語ってくれたこと～

(1) 多種多様な生き物

- * 「この川にはホタルが顔にあたるくらいたくさんいた」
- * 「ポテジャコがあふれるほどいた」

(2) 生活の中で生きていた湖と川

- * 「この川からは風呂水をくんで洗濯をした」
- * 「この川の水は昔は飲めたのに・・・」



(3) 子どもたちの遊び場としての水辺

- * 「毎日、川に魚つかみにいった」
- * 「えかい(大きな)ナマズをつかんだことはわすれられん」

(4) 小さなコミュニティによる自主的な治水対策と川への愛着

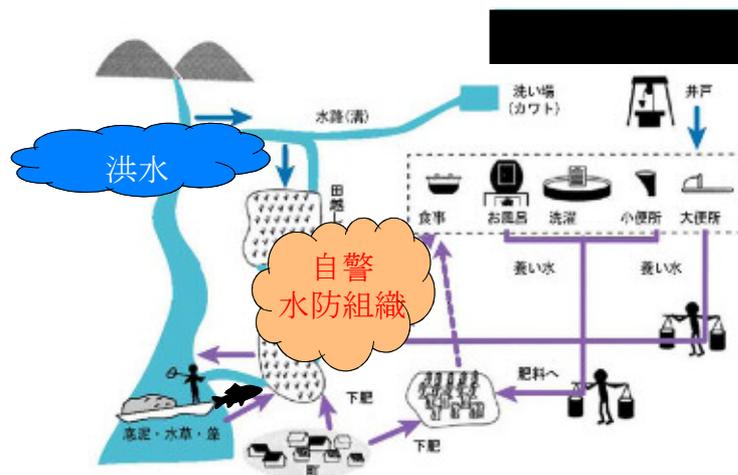
- * 「大雨のとき、堤防の見回りを自分たちでした」
- * 「堤防直しも自分たちでした。川は私たちのもの」



“近い水”が生きていた時代

～循環と使いまわし、自己管理の時代～

■ 水システム模式図 江戸～明治中期(昭和30年代まで)



出典: 嘉田由紀子:『環境社会学』、岩波書店、2002、P15

